

広島大 教育

岩重博文

ミサワホーム 総研

○花田貴子

目的：今日の家庭生活では、高齢化や地価高騰など多くの問題を含みながら、新しい展開として、家族周期（ライフサイクル）に対応した住居が求められている。家庭生活を反映しやすい住空間として、特に「居間」に着目し、家族の周期段階（ライフステージ）ごとの住要求の変化と生活空間の関わりについて、居間における生活実態調査の分析を行い、今後の居間のあり方について考察する。

方法：家族のライフステージを、S1；第1子出生前，S2；第1子未就学，S3；第1子小・中学生，S4；第1子高校生以上，S5；子供の独立以後，の5ステージに分類し、各ステージ約10家族計52家族を調査した。調査方法は、住宅訪問、居間スケッチと家族代表者への質問（調査用紙に基づく）。調査内容は、家族構成と住宅概要、居間の現況・平面等、居間の使用状況（時間・内容等）、居間に対する意識（住要求等）である。

結果：①居間の現況では、環境（日照・面積等）や設備（家電機器等）が全ステージにわたり居間の生活を左右し、機能と起居様式はS2とS5各ステージでの使用法に大きく関わる。②居間の使用状況では、夫婦で一緒に事を行うS1に対し、S2とS3では家族全体での居間使用は少なく、父親の不在が多い。S2では居間を子育ての場として使用し、S4では主婦の自由時間使用、S5では老夫婦の独立内容長時間同時使用が多い。③居間に対する意識では、居間の中心がS2とS3では父親と子供であるのに対し、S5では妻となる。また、S2では家族増員に伴うコミュニケーション、S5では安らぎ・コミュニケーション・使い勝手を同時に望んでいるが現実との間になお差が認められる。